



研究所だより

岩城 由紀子

6月に総会を開く団体は多くありますが、協同総研もその一つです。この号が届く頃には、みなさまのご協力のもと、無事に総会が終わっていることでしょう。ようすについては、誌面でもまたご報告をさせていただきます。

私たちの総会の前の週には、労協連・労協センター事業団の総会・総代会が17日～19日までの3日間にわたって開催されます。それらの2022年度活動方針の中で、私は個人的な関心から、多様な学びと育ちの場となる「ホームベースドエデュケーション」に関する取り組みに注目しています。

ホームベースドエデュケーションとは、家を中心にして、子どもの興味や関心から、学校教育だけではなく、社会の様々な資源を活用してオルタナティブな学びをつくる取り組みのことです。日本ではあまり馴染みのない言葉ですが、例えばアメリカでは、およそ200万人の子どもたちがホームベースドエデュケーションを実践しているとされています。

文部科学省の調査によると、2020年度に不登校だった小中学生は8年連続で増加し、19万6千人を超え過去最多となっています。そうした中、TDU・雫穿大学の朝

倉代表を中心に「ホームベースドエデュケーションの会」が社会連帯TOKYOのモデル事業として立ち上がり、子どもが学校に通えないなどの悩みをもつ組合員が集い、学び合う実践が始まりました。労協連は、「多様な学びと育ちの小委員」を立ち上げ、すべての命が大切にされる地域づくりを社会に問いかけようとしています。

私も、このホームベースドエデュケーションの会の定例会に参加しています。小学校低学年の子どもが学校へ行き渋るようになり、悩んでいたときに声をかけていただいたのがきっかけです。定例会では、なぜ子どもが学校に行けなくなったのか、学校を休ませた場合の家での過ごし方や、仕事との両立の悩みなどを参加者一人ひとりが語っていきます。全く同じ状況の人はいませんが、同じような悩みを抱える人の存在は大きな励みになります。他にも、ホームベースドエデュケーションで学んだ方や、学校へ行けなかった当事者の生の声を聞いたときには、多様な生き方や視点があることや、親自身の価値観や人生観が問われることに気づきました。多様な学びや育ちについて、私も試行錯誤しながら考えていきたいと思います。